
平並学園探偵クラブ

叶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

平並学園探偵クラブ

【Nコード】

N8199M

【作者名】

叶

【あらすじ】

平並学園の探偵たちは、みんな個性的すぎ!?

不思議部長に俺様副部長、怪力平部員の3人で繰り広げるとたばた学園ギャグミステリー!

「 謎はとて…、解けた!」

「 噛むなよバカ」

「かも!!」

「しかも”かも”だしねえ」

プロローグ

コッ コッ コッ、

原田望美^{はらだのぞみ}は、平並学園中等部3年生だ。

彼女もやはり思春期の女の子で、学校帰りの寄り道に楽しみを持つたりもしている。

そして今、それまで一緒にいた友達と別れ、ひとり帰宅路についていた。

いい加減、日も落ちてきており、少し薄暗い道を歩いていた。あまり人通りの多い道でないため、周りには人がいない。

はずなのだ。

望美は、先程から、後ろで聞こえる足音に、肩を震わせていた。

初めは気のせいかと思ったが、ちらりと後ろを向けば、その人影はさっと物陰に隠れてしまう。

尾行されているのだろうか。もしかすると、ストーカーかもしれない。

「美人は辛いな、と」

本人は至^{のたま}って呑気なものだ。

その日は、まったく気にせず家へと帰り、そのままご飯を食べるころには、ストーカーのことは頭の中からすっかり消えていたのだ。た……。

家のポストに入っていた封筒の中身を見て、悲鳴をあげることにするのは、その2、3日あとのことである。

依頼

木原春子きはらのはるこは、平並学園高等部1年生である。

この少女、見た目はとても高校生に見えないほどの童顔の持ち主で、さらに体も小柄なためよく中学生に間違えられる。

だが、そんな容姿を見て侮おそった者は、大抵痛い目を見ることとなる。

「春ちゃん！ちょっとこのソファ持ち上げてくれるー？」

「はい」

そう言うなり春子は、言われた通りソファを軽々と持ち上げた。

木原春子と言えば、学園でも知らない人間がいけないほどの怪力の持ち主である。

その細い腕のどこにそんな力があるのか、それを知る者は1人もいない……。

「ありがとー。ソファの下へそくり隠してるの忘れててさー」

「……部室のソファの下をへそくりの隠し場所にしないでくださいよ……」

春子が呆れた目でみると、少年は朗らかに笑って見せた。

この少年こそ、我らが探偵クラブの部長、秋原大和だ。

あきはひろやまと

彼は、平並学園高等部2年生で、春子とは先輩後輩の仲である。

ただ、やはりこの男も変わっており、自分のしたいことは何でもするという自由な人間だ。

いつでもどこでもマイペースな部長に、春子はもう何度も呆れ、何度も和まされている。

「そう言えば、来ませんねー夏樹先輩」

「ああ、そう言えば来てないねえ……」

「ははっ！散々人に遅刻厳禁で言っというて自分が遅刻してやんの、

痛い！！」

春子に馬鹿にされ、頭をはたいた少年こそ、篠原夏樹しのはらなつき、その人だった。

平並学園高等部2年で、探偵クラブ副部長である彼は、なかなか整った顔立ちをしていた。

ただ、春子を見下ろしながら浮かべるその表情は、口元しか笑っていないく、正直恐怖さえ覚える顔だ。

「はは！春ちゃんは随分とまあデカい口が叩けるようになったねえ？」

「すみませんごめんなさい反省してます

ッ!」

笑顔で言いながら、手は春子の頭をおもいつきり下へと押しつぶしている。

そんな彼は、やはり学園でも有名なほど唯我独尊な性格をしていた。ただ、それが自惚れでなく、頭もいいし運動神経もいいので、春子としても何とも言えない。

「あ、あの……」

春子は、そこでやっと夏樹の後ろに立っていたる少女に気がついた。見ると、それは中等部の制服で、わけがわからず夏樹の方へ振り向いた。

「俺は理由もなく遅れてこないよ。お前じゃあるまいし」

しっかり皮肉も言いながら、夏樹はストーカーだって、と言った。

それを聞いた春子は、目を丸くした。

「ストーカー!?!」

そのあと、夏樹先輩が!?!と言った春子は、再び夏樹に押しつぶされ、それを見た大和は吹き出していた……。

「さて。それじゃあ、話を聞こうかな？」

そう言つて大和は、依頼人 原田望美へとほほ笑んだ。

望美はその笑顔に安心したのか、落ち着いて話を始めた。

話を聞き終えた春子は、顔を真っ赤にして憤慨していた。

「何て奴だ！ 見つけ次第、鉄アレイでも投げつけてやる！！」

「シャレになつてないから、ちょっと落ち着こうねー」

そう言つて春子を落ち着かせた後、大和は再び望美の方を向いた。

「うーん……嫌じゃなければ、でいいんだけど、さっき言つてた封筒の中身、見せてもらつてもいいかな？」

大和がそう言つと、望美はすまなそうに目を伏せ、

「すみません……。あまりに気持ち悪くつて、破いて捨ててしまつて……」

「そつか……。まあ、それが普通の反応かもしれないね」

証拠品を捨てられ、少々残念な気もしたが、大和は仕方がないよ、と言つて変わらず微笑んでいた。

「あ、でも、内容は覚えてるんです。中は手紙だったんですけど、なんか……紙いっぱいに”好きだ”とか”愛してる”とかつてあつて……それと一緒に、私の、その……下着姿の写真が……」

それを思い出したのか、望美は顔を青くして震えていた。

そんな望美を見て、夏樹は眉を寄せた。

「気色悪い……。んなもん送ってなんになるんだっつーの」

「まあ確かに、”いつでも君を見ているよ”っていう示しにはなるかもねえ」

大和の言葉にさらに青ざめる望美に、春子は、

「さいつてー！女の敵！！任せて、望美ちゃん！！絶対にソイツ、吊るしあげてあげるからね！！」

と肩に手を置いた。

「ついでに、ソイツ見つかったら顔面にお見舞いしとく？」

と尋ねる春子に、望美は吹き出した。

「ありがとうございます。どうか、お願いします！」

そう言った望美に、3人は力強く頷いて見せたのだった。

部活動開始

「何？依頼があっただと？」

そう言つて、男は目をむいた。

「何で俺に連絡しない！」

「ごめんね銭ゲバ。職員室に行くの、面倒くさくて……」

まったく反省する様子も見せず、夏樹はケロリとしている。

そんな夏樹に、まったく、とぶつぶつ呟いている男こそ、探偵クラブ顧問、かねだきよこすけ金田京介である。

教師でありながら、何に対してもやる気を出さず、常に面倒くさそうな目をしている彼だが、唯一と言つていいほど熱心になることがある。

「それで？ちゃんと金の話はしたのか？」

金田の言葉に、3人はため息をついた。

彼、金田京介は、呆れるほどの守銭奴しゆせんぬである。

そして、この性質から、彼は生徒に”銭ゲバ”と呼ばれることとなった。

「大体な、お前らは甘いんだよ、色々と！こっちは仕事でやってんだから、金をもらうのが道理だろ？」

「先生」

春子は、呆れたようにため息をつき、

「私たちは仕事じゃなくて、部活動をしているんです！」

「ん？そうだったか」

とぼけたようにそう言うと、金田はとにかく！と騒いだ。

「ただでさえ、うちには部費が少ないんだぞ？依頼で稼がないで、一体何で稼ぐんだ！」

そうはいつても、もともと探偵クラブには部費が必要ないくらいなのだ。

本業の探偵は、さぞ“捜査費”が必要なかもしれないが、これは学生のクラブ活動の一環のため、そこまで本格的なことはしていない。

強いて言うならば、少ない部費で払うのは春子の怪力の犠牲となる破壊物の弁償だった……。

あとは体力など、若さと個性でカバーできるので必要ない。

大和が交渉、夏樹が推理、そして春子が力仕事や犯人への制裁である。

「あのお、何で俺が探偵クラブの顧問をやってると思ってるんだ？」

「聞いたことないし、分からないねえ」

そう言った大和に、金田は胸を張って

「自慢じゃないが、金がたくさん入ってくると思ったからだ！」

「本当に自慢できたもんじゃねえな……」

そう言った夏樹を始め、他の2人も呆れたように金田を見ていた。

「さて……。じゃあそろそろ、部活動を始めようか」

そう大和が言うと、夏樹と春子は頷いた。

「とりあえず、望美ちゃんの安全が最優先！」

依頼主の本質

その翌日、春子は望美の家まで来ていた。昨日の放課後も、同じように家まで送ってきている。

もちろん、いつ犯人が現れても、対処できるように、だ。

家の前で待っていた春子に、望美はおはようございます、と小さく会釈えしやくした。

「おはよう！今日から　　昨日からかな？　　毎日、私が送り迎えするから、安心してね！」

そう言った春子に、なぜだか望美は少し微妙な顔つきになった。

春子がきよとんとしていると、望美は「あの……他の2人の先輩は……」と言った。

春子はああ、と頷くと、「来ないよ」と言った。

それを聞いた望美は、不満を隠そうともせず、

「どうしてですかあ？」

「え？だって、私1人いれば十分だし……それに、あの2人にはあの2人の仕事がちやとあるしね」

そう言うと、望美は唇を尖らせた。

春子は、そんな望美に思わず苦笑してしまった。

確かに、あの2人は黙っていればなかなか格好いいもんなあ

……。

口を開けばちよつと　　いや、大分変ってるけどけど。

それを思うと、春子は少し笑えてきた。

「　　原田さんはどんな人が、ですか？」

「うん、できれば教えてほしいんだけど……」

放課後、部活動として大和と夏樹は聞き込みをしていた。

平並学園の高等部と中等部は、渡り廊下を渡ればすぐに行ける距離にあるため、自由に行き来することができた。

大和と夏樹も、その渡り廊下を歩いて中等部に聞き込みに来ていた。高等部にある”探偵クラブ”は、平並学園の全生徒の間で有名なクラブなので、聞き込み何かは別段珍しくない。

もともと、聞き込みをしているのは専ら大和だけで、夏樹はそれを聞いているだけなのだが……。

「原田さんねえ……」

そこらにいる適当な女生徒に尋ねてみたのだが、その生徒はどうも

答えることを渋っていた。

「……何か、答えられないことがあるかな？」

大和がそう言っていると、女生徒は諦めたように肩をすくめ、

「彼女、あまり好かれてないですから」

「好かれてない？」

大和と夏樹の2人は、少し驚いた。

昨日見た限りでの望美は、とても礼儀正しい、ただの娘に見えたからだ。

しかし、話を聞いて、2人はさらに目を丸くした。

「彼女、すごい男好きで、男癖が悪いんですよ。1か月に2、3人は相手が変わっていますから」

目の前の少女は、吐き捨てるようにそう言った。

「しかも、人の彼氏を奪っちゃうこともあるし……」

援助交際なんて噂もありますよ、と彼女が言っていると、2人は啞然としてしまったのだった……。

噂と推測

「えー!? 望美ちゃんが、ですか？」

「らしいね」

驚いたように目を見開く春子に、大和は軽く肩をすくめた。

話はもちろん、望美の男好きだということや、援助交際の噂である。

「た、確かに望美ちゃん、ちょっとミィハーな感じの子でしたけど……それでも、援交はないですよ!」

「何でそう言いきれる?」

妙に力を入れて主張する春子に、夏樹は面倒臭そうに尋ねた。

春子はそれに対し、もごもごと口を動かさず、

「……勘、です……」

と小さく答えた。

それを聞いた夏樹は大きくため息をつき、大和も苦笑いをしている。

それを見た春子は、慌てた様子で言葉をつけたした。

「で、でもですね! 望美ちゃん、一緒に登校するときもすごくいい子で……まあ、確かに先輩方のプロフィール聞いたり狙っちゃおう

かなとか言っちゃうおちゃめな子ではありませんたけども……すごくいい子でした！」

「……お前のその主張によって、原田望美の男好きが証明されたことになるな」

ニヤリと笑った夏樹の顔を見て、春子はしまった！と言うように口をおさえた。

「まあ、それはさておき。男好きってだけでその噂まではいかねえだろ」

「で、ですよね！じゃあやっぱり望美ちゃんは援交なんかしてないんですよ！」

「事実から生まれた噂ってこともあるだろうけどな」

火のないところに煙はたたない、とぼやく夏樹に、春子は頬を膨らませた。

「でも、学校中のどの子に聞いてもその噂は耳に入ってきたしねえ……」

そう言っただけで考え込む大和に、春子は渋い顔をして俯いた。

あれからしばらく聞き込みを続けていた大和と夏樹だったのだが、中等部の誰に聞いても原田望美の噂はついてきたのだ。

まだ本人には言っていないが、やはりあれだけ騒がれていれば気付くくらいことはしているだろう。

「とりあえず、今はその噂は置いておこうか。俺たちがされた依頼は望美ちゃん噂を調べることじゃなくて……」

「ストーリーカーを吊るしあげる、ですよね！」

「……なんか、変に解釈されてないか？」

ぐっ、と拳を固める春子に、夏樹は呆れたような顔をした。

それを見た大和は、くすくすと小さく笑う。

「じゃあ、とりあえずのところは望美ちゃんのごことは春ちゃんに任せるね。俺は聞き込み、夏樹は総まとめよろしく」

「はいっ！」

「了解」

2人の返事に大和が満足そうに頷くと、がちゃりと音を立てて部屋のドアが開いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8199m/>

平並学園探偵クラブ

2010年11月5日08時24分発行